

30amG-150

介護支援システムの開発 ～要介護認定基準項目と認知症との関連付け～

加藤 哲太¹, 山田 純司¹, 高木 教夫¹, 〇高木 慶子¹, 杉山 康彦²(¹東京薬大薬,
²シーイー・フォックス)

【目的】介護サービスの需要は確実に増加する。一方、過剰な介護は廃用症候群を惹起する。廃用症候群とは不活発な生活状態が原因で心身機能が低下する事である。特に高齢者は数日から数週間で現れ、身体機能の低下だけでなく自律神経、さらには精神機能の低下により認知症を誘発・促進する場合がある。これら悪影響の防止には、高齢者の状態(症状)を的確に捉える事が重要である。政府は廃用症候群防止の観点から介護認定調査項目(項目)の一部見直を実施した。しかし、“項目だけからは症状が生理機能の低下によるか疾患によるか等の類別はできず、複雑な症状把握は困難”などの課題があるので、高齢者への適切な支援には項目と疾病を融合し評価することが不可欠と推測する。そこで我々は、廃用症候群に陥らないための高齢者支援、すなわち信頼性の高い介護認定評価の実現を目的に「介護認定調査項目」と「認知症」を関連付けた“介護支援システム-介護認定版-”の構築を試みた。今回は認知症化率 100%のアルツハイマー病(AD)を中心に検討した。

【方法】本システムの構築は、AD 症状データベース(ADDDB)と介護認定で使用する項目の関連付けが必須である。ADDDB は認知症疾患-治療ガイドライン 2010を参照に、要介護認定-認定調査項目(厚生労働省)と融合した。症状入力にはネットワークへの接続が容易、画面サイズが大きく操作性が良好な事から iPad を利用した。収集した入力結果は介護支援システムで自動分析され「疾病の可能性(原疾患)」「疾病でない可能性(老化, 新規疾病)」「不明」に類別した。

【結果】廃用症候群の予防には、症状を的確に捉えることが極めて重要である。本システムは症状の類別を可能にした。このことは廃用症候群の誘発を防止し、さらに認知症などの早期発見や症状の進行度合いの把握に繋がると考えられる。